

分団委員長（クラス委員長）

朝一番に登校したカンホは、もらったばかりの新しい机のすみっこに自分の名前をナイフで彫っていた。

カンホが最後の文字を彫っているときだった。同じ机で隣の席のヨンシクが見つめて叫んだ。

「おい、君、これはなんだ！ 新しい机になんてことするんだ」
声を聞いた級友たちが二人をとりかこんだ。

「わあ！ こいつ、とんでもないやつだな」

「おい、おまえ。正気か」

「机のすみっこに彫っただけじゃないか。なにがいけないんだ」

カンホは負けずに言い返した。

「なんだと！？」

子どもたちは口々に文句を言った。分団委員長¹のチョルスは彼らにまじって、黙ってカンホと机をかわるがわる見つめた。

〈どうしてカンホはあんなことをするんだ〉

その場で思いきり叱りつけたいような気もした。しかし分団委員長の自分までが責めたててはいけないと思い、怒りをおさえた。

どう対処していいか、チョルスには良い考えがうかばなかった。

先生には心配をかけたくないので、知らせたくなかった。

〈分団委員たちと相談してみよう〉

チョルスは、こっそりと委員たちを連れて学校裏の公園に行った。

サンホはカンホのナイフを取り上げようという意見を出し、チンミョンはポスターを描いて壁に貼ろうと言った。

全員が賛成した。

「カンホがナイフをよこすかな？」

「おとなしくよこさなきゃ、取り上げるのさ。だいじょうぶ。僕がすぐに取り上げてくるから」

チンミョンはグラウンドを見渡すと、イチョウの木の下でパチンコ銃を作っているカンホのほうに向かって大急ぎで走っていった。

「カンホ、そのナイフをよこせよ」

「僕のナイフを、なんで君にやらなきゃいけないんだ」

「分団委員会で決定したんだ。〈批判〉されなきゃ、渡さない気かい？」

「ふん、〈批判〉だって？ 絶対に渡すものか」

カンホはぴしゃりと言って、鉄棒のほうへ逃げていった。

チンミョンが手ぶらで戻ってくると、皆は分団集会を開いて取り上げようと言った。

「おい、こんなつまらんことでいちいち分団集会を開いたら、一日に何度集まっても足りないぞ。心配するな。僕に名案があるから。」

¹ 北朝鮮の小学校には学級ごとに分団委員長と委員で構成される「分団委員会」がある。

分団委員のサンホはポケットから鉛筆を取り出して、わざと芯を折った。それから静かにカンホに近づいた。

「カンホ、君のナイフをちょっと貸してくれたまえ。鉛筆の芯が折れちゃったんだ」
サンホは何食わぬ顔でカンホに鉛筆を見せた。

あやしいなという目でサンホをにらみつけるだけで、カンホはナイフを出さない。

「ほら、鐘が鳴るまえに早く貸したまえ」

サンホはしやあしやあと手を出して催促した。

カンホは仕方なくナイフを出してよこした。

サンホは、その場で鉛筆を削りはじめた。そして削りおえるとさっとナイフを自分のポケットにおさめた。

「このナイフは分団委員会で没収するから、そのつもりで」

これを聞いてカンホは飛びあがった。

カンホはサンホに掴みかかり、ナイフの入ったポケットをつかんだ。

「放したまえ！」

サンホは目を大きくして、カンホを睨みつけた。

「なんで僕のナイフを没収するんだ。よこせよ」

カンホはサンホのポケットから手を放さなかった。

「本当に放さない気かい」

サンホはいきなり体をひねり、カンホの肘を一発強く叩いた。そのはずみにサンホのシャツのポケットがびりっと裂けた。

こうなるとカンホも少し怖くなったのか、それ以上騒げず、その場で泣きはじめた。

(2)

そのとき始業の鐘が鳴った。

泣きつづけていたカンホは教室に入りながら、もっと大声で泣いた。

教室にいたチェ先生がカンホを見た。

「カンホ、なんで泣いているの」とチェ先生が訊いた。

「サンホが、僕のナイフを返してくれないんです」

やっとのことでこう答えたカンホは、肩をふるわせて泣きつづけた。

「サンホ、どうして人のナイフを取るの」

サンホはもじもじと立ちあがった。

チェ先生の視線が、その破れたシャツの上にとまった。

「分団委員が友だちと喧嘩したのですか」

チェ先生は低い声でこう言った。

「先生、これを見てください。こんないたずらを見ても黙ってなきやいけないんですか」
とサンホは、名前を彫った場所を指さした。

チェ先生が教壇から降りてカンホの机の前に行った。彫った場所をしばらく見ていたチェ先生は、だまって教壇にもどった。

「先生、カンホを分団集会で<批判>してやりましょう。分団委員会でナイフを取り上

げることにしたのに言うことを聞かないで、人のシャツまで破ったんですから」

ヨンシクが真面目な顔をして、きびしい口調で言った。

「分団委員会でナイフを取り上げることに決めたんですって？」

チェ先生が目をみはった。

「分団委員たちが集まってそう話し合いました」

チョルスが立って答えた。

「それでナイフを取り上げたのですか」

「はい」

「そのナイフは、だれがもっているの」

「サンホがもっています」

「そのナイフをカンホに返しなさい。カンホは、もう二度とこんなことはしないはずで
す。カンホ、そうでしょう」

サンホはカンホにナイフを返し、チェ先生は授業をはじめた。

授業が終わると、チェ先生はチョルスに、放課後、教員室に来るようにと言った。

放課後、チョルスが教員室に行こうとしていると、チンミョンがチョルスのところに走
ってきた。

「ね、このポスター見てくれ。いい線いっているだろ」

チョルスはポスターを広げて見た。カンホのことを絵にしたポスターだった。

「先生に見せて、貼ることにしよう」

チョルスはチンミョンが描いた絵をくるくる巻いて、教員室にもっていった。

チェ先生は仕事の手をとめて、チョルスを優しく迎えた。

「カンホの問題について、分団委員たちが集まって話し合ったのですか」

「はい」

「全員がナイフを取り上げようと言ったのですか」

「はい」

「分団委員長もそうするのが正しいと思ったの」

「はい」

チェ先生の顔が曇った。もっていた鉛筆で机をトントンと叩いていたが、やがて静かな
声で言った。

「重要なことが提起されたときに、委員が集まって話し合うのはとてもいいことです。
でもナイフを取り上げるのはやり過ぎでした。ナイフを取り上げる前に、一度私と話し合
ってくれたらよかったです」

チョルスは先生の言葉にうつむいてしまった。

カンホからナイフを取り上げさえすればいいと思った自分の考えの浅さをいまさらなが
ら思い知ったのだ。

「僕が間違っていました」

「大丈夫。何かしようとするれば間違うこともあるし、やり過ぎることもあります。教訓
を得ればいいのです。ところで、カンホはいつもナイフで遊んでいるのですか」

「そうです。家でも、いつもナイフ遊びだそうです」

「ナイフでどんな遊びをしているのかしら」

「弟のおもちゃを作ったり、机とか椅子とか、いろんなものを作るのだそうです」

この話を聞いたチェ先生の顔に明るい笑みが浮かんだ。

「カンホが器用なのは確実ね。だったら、その才能で分団と学校のために良いことをさせてあげましょうよ」

このときチョルスはもってきたポスターをさすっていた。

「チョルス、それはなに？」

「掲示板に貼ろうと思っていたポスターです」

「ポスターですって？ どれどれ」

チェ先生は、その絵をしばらく見てから言った。

「分団委員長はどう思いますか。これを貼ったらカンホが反省すると思う？」

「もっといじけるんじゃないかと思います」

「そのとおりです。この方法では、カンホの悪いところを直すことはできません。カンホにできる仕事を与えて、カンホがやり遂げたら、それを褒める記事を書いて壁に貼ることにしましょう」

「はい、わかりました」

先生と会ったチョルスは目の前がぱっと開けたような気がした。

絶対にカンホが自分の悪いところを反省するよう導こうと心に誓いながら、チョルスは明るい気持ちで教員室を出た。

(3)

カンホが家に帰ってから1時間くらいして、チョルスはカンホの家を訪ねた。

「カンホ、いるかい」

何回かドアを叩いたけれど、返事がなかった。

たしかに部屋のなかで人の気配がしたようなのに、ドアは開かなかった。

チョルスは、なんだか腹が立ってきて、階段を下りはじめた。だがそのときチョルスの頭に浮かんだのは、友だちの悪いところを直してやろうと決心した人間が、これしきのことを我慢できなくてどうするのだという考えだった。何もしないで帰る自分が恥ずかしくなった。

チョルスは、また階段をのぼった。

彼は、さっきよりも強くドアを叩いた。ようやくドアが開いて、カンホの顔があらわれた。その顔は熟したトマトみたいに真っ赤だった。

しかし気づかぬふりをして、チョルスはざっくばらんに話しかけた。

「なにをしてたんだい」

カンホはやっと口をひらいて、「なんにもしていないよ。入りなよ」と言った。それから椅子をもってきて、チョルスの前に置いた。

そのとき、チョルスの顔色をうかがっていたインホが、カンホにせがんだ。

「兄ちゃん。はやく銃を作って」

「静かにしているんだ」

カンホはインホを軽く睨みながら、外で遊べと目で合図した。

「はやく作ってやりなよ」

チョルスがカンホを見て言った。

「ほら、分団委員長も作ってやれって言ってるじゃないか」

カンホにせがんでいたインホは、ふと思いついたように、チョルスのよこに来て言った。

「兄ちゃんたらね。さっき委員長がドアを叩いたとき、委員長が来たといって、作っていた銃を全部あのベッドの下におしこんだんだよ。銃を作っても怒らないでね」

「銃を作ってくれるのに、怒るわけがないだろ。褒めるから心配しなくていいよ」

「ほら、見て！」

インホは急に部屋の床に這いつくばると、もぞもぞとベッドの下に潜っていった。そしてすぐに銃の材料の竹筒や板切れ、針金の切れ端、そして道具箱などをもって出てきた。

道具箱には、のこぎり、かんな、のみ、くぎ抜き付ハンマー、三角定規、錐、ありとあらゆるものが入っていた。

「わあ、なんでもあるね。カンホ、これ全部、君が使う道具なのかい」

チョルスが目を丸くして尋ねた。

だがカンホは顔を真っ赤にして、どう答えていいか分からず、まごついていた。

「うん。兄ちゃんのだよ。これ全部、だれが作ったと思う？ 全部、兄ちゃんが作ったんだ」と、インホは椅子、机、デスクスタンド、写真立て、そして自分のおもちゃを指さした。

チョルスは驚きを隠せず、カンホを見つめた。

「おい、カンホ。すごい腕前じゃないか。早く弟に銃を作ってやれよ」

カンホはにやりと笑うと、ほとんど出来あがっていた銃にグリップをかつちりと取りつけた。そして完成した機関銃を上下左右からよく見たあと、ひょいとインホに差し出した。

「ほら、これでいいだろう」

そう言ってカンホはインホに機関銃をもたせてやった。

銃を受け取ったインホはグリップをつかんで、ぐるぐるとまわした。

インホは嬉しさのあまり顔を笑いでいっぱいにして、ピョンピョン跳ねながら外に走っていった。

「銃を作ってやったことを知ったら、先生、怒るだろうな」

カンホは心配そうに言った。

「怒るはずないじゃないか。弟に良いおもちゃを作ってやるなんて、とてもいいことだよ」

「でも、またナイフ遊びをやっているって、きっと叱るさ」

「本当にわからんやつだな。机に名前を彫るのと弟におもちゃを作ってやるのと、同じなわけないだろう」

カンホはしばらく下を向いて何か考えていたが、チョルスにナイフを差し出した。

「このナイフ、先生に渡してくれ」

「そんな必要はないよ。そのナイフで良いことをすればいいじゃないか」

「良いこと?!」

カンホの目がかがやいた。

「そうでなくても、君にひとつ頼みがあって来たんだ」

「頼み？」

「先生がつかう指し棒がちょっと古くなったんで、あれを作って、先生に差し上げてはどうだろう」

「僕が作ったのなんか、先生、使ってくれるかな」

「なにを言うんだ。使ってくれるにきまってるよ」

カンホの目が生氣にあふれるように見えた。

この夜、カンホの家の奥の部屋の明かりは夜更けまで消えなかった。

(4)

翌朝のことだった。

チョルスが早く登校すると、カンホがナイフの彫り痕をきれいに消した机の前に座っていた。

それを見たチョルスの顔には自然と笑みがあふれた。そのときカンホが紙で包んだ何かをチョルスに差し出した。

「えっ、もう出来たのかい」

「うん。ちょっと見てくれ」

チョルスは包みをひらいた。

包み紙の中から先端を赤く塗った白い指し棒が出てきた。

「わあ、すごくかっこいいな」

集まった子どもたちはこう言って褒めながら、指し棒を手から手へと渡していった。

「よし。先生に差し上げておいでよ」

チョルスは差し棒をカンホに差し出した。

カンホは驚いて手をひっこめた。

「やだよ。僕がもって行って叱られたらどうするんだ」

「叱るものか。かえって喜ぶよ」

カンホの心配をなだめて、チョルスは軽くカンホの背中を押した。

その日の一時間目の授業にチェ先生が入ってきた。

「今日は、カンホが作った指し棒で、皆さんと勉強することになりました。カンホは、とても立派なことをしました」

この言葉を聞いたカンホは下を向いて頭をかいた。そして、顔を真っ赤にしながらかチョルスの方を見た。

ちょっと離れた机に座っていたチョルスは、目で合図しながら笑顔で祝福してやった。

カンホの胸は熱いものでいっぱいになった。

〈分団委員長！ありがとう〉

カンホは、笑っているチョルスをうれしそうに何度も見つめた。

級友たちは、良いことをして褒められているカンホをうらやましそうに眺めた。

チンミョンは昨日描いたポスターを破り、新しい絵を描いて貼った。

花束に囲まれてにこにこ笑っているカンホを描いた絵だった。